

聖書: 第一列王記8章54～66節

説教: 主と心をつなげる

はじめに

ソロモンが父ダビデの跡を継いでイスラエルの王座についたのは、まだ二十歳にもなっていなかったときでした。なにも経験がない青年が、いきなり国のトップに立たされ、政治、軍事、裁判、宗教のあらゆる分野で采配をふるわなければならない。誰が考えても大変なことです。一番悩んだのは本人でした。そこで彼はあるときこう祈ります。「善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。」この願いは主の御心にかない、彼は世に並ぶ者がいないほどの知恵を神からいただくこととなります。

そのような知恵に満たされたソロモンが真っ先に考えたのは、父ダビデの果たすことのできなかった神殿建設のことでした。彼はこのことを慎重に進めます。本当に自分がすべきなのか、まず神の導きを求め、その確信をいただいてから初めて建設に着手していきます。それから七年後、神殿は完成し、記念式典を盛大に執り行われました。その式典の中でソロモンは主の祭壇の前でひざまずきながら七つの祈りをささげました。それはひとこと言うならば、これから民たちが罪を犯すことになったとしても、もし主に立ち返って悔い改め、それぞれの置かれた場所で主に向かって罪を告白し、祈るならば、どうかその罪を赦し、祈りと願いを聞き届けてもらいたい、というものでした。それが前回までのあらすじです。

今日の所で、ソロモンはイスラエルの前集団に向かっていくつかのことを語っています。それはどんなことであったのか。そして私たちにどんな意味があるのか。そのことを考えてまいります。

## 1 主がモーセを通して告げておられたこと

### 1) 良い約束とは

まず56節を読みます。「約束どおり、ご自分の民イスラエルに安住の地をお与えになった主はほむべきかな。しもべモーセを通して告げられた良い約束はみな、一つもたがわなかった。」

ここに「モーセを通して告げられた良い約束」とあります。ソロモンの時代から見ればモーセはおおよそ五百年も前の人です。これを日本に置き換えてみれば、今の総理大臣が織田信長の時代に書かれた記録を持ち出してきて、そのとおりになったとかならなかつとか語っているのと同じで、ちょっと驚き

ます。しかしイザヤ書40章8節に「草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことばは永遠に立つ」とあります。神のことばは、何百年、何千年経とうとも変わりません。ということは、ソロモンが五百年前の話を持ち出しても別に驚くことではない。実は私たちも同じようにして、二千年前という古い話だけれど、十字架の出来事をそのまま昨日のことのように語っているわけです。

さてでは、モーセの時代に主が語られた良い約束とは何か。申命記12章10, 11節前半にあります。イスラエルの民が荒野をさまよっていたときにモーセが神のことばとして語ったことばです。「あなたがたは、ヨルダン川を渡り、あなたがたの神、主があなたがたに受け継がせようとしておられる地に住み、主があなたがたの回りの敵をことごとく取り除いてあなたがたを休ませ、あなた方が安らかに住むようになるなら、あなたがたの神、主が、御名を住まわせるために選ぶ場所へ、私あなたがたに命じるすべての物を持って行かなければならない。」

民たちはやがて約束の地に導かれ、そこで休み、安らかに住むことができるようになる。これがしもべモーセを通して告げられた良い約束でした。

### 2) 御名を住まわせる場所

この約束は一つもたがわなかった、主の約束どおりになったとソロモンは語っています。「すでに人々は神の約束の地で暮らしている。当たり前のこと」と言って、そこで納得するかも知れません。でも神の約束のことばをよく見ると、二つのことが書かれているのに気がつきます。前半は「あなたがたは約束の地で安らかに住むようになる。」それは確かに実現しました。でも後半はこうなっています。「主が、御名を住まわせるために選ぶ場所へ中略) すべての物を持って行かなければならない。」これはいったいどのことか。神殿です。その神殿にすべての物を持って行かなければならない。確かに持って行きました。ソロモンは主の契約の箱を神殿の中に収めるとき、羊や牛を数え切れないうほいけにえとしてささげ、今日の箇所でも牛二万二千頭、羊十二万頭をささげたと書いてあります。

ということは、モーセを通して告げられた主の約束とはなにか。民たちが約束の地で安らぐことと、神殿でいけにえをささげていくこと、これでワンセツ

トになっていた。そうしますと、主の宮が完成したことはどんな効果を生むことになるか。ソロモンの時代の人たちにとって、私たちもそうですが、モーセという大昔の先祖たちが聞いた約束のことはどうしても実感がわかない。ぴんと来ない。でもいま神殿が建ちました。それを目で見て、主がモーセを通して告げられた良い約束は本当だったと実感することになります。人間は弱い者ですから、ときには目に見えるような形で私たちが気落ちしないようにと神ははげましてくださるわけです。

## 2 ソロモンの願い

1) 私たちを見放さず、見捨てられませんように  
続きを見ていきましょう。57節。「私たちの神、主は、わたしたちの先祖たちとともにおられたように、私たちとともにいて、私たちを見放さず、私たちを見捨てられませんように。」

主はイスラエルの先祖たちとともにいてくださったと言っています。どうして主はそのようにしてくださったのでしょうか。先祖たちが信仰者として立派な人々だったのか。とんでもありません。モーセは死の間際にこんな遺言を残していました。申命記31章27節。「私は、あなたの逆らいと、あなたがうなじのこわい者であることを知っている。私が、なおあなたがたの間に生きています。今ですら、あなたがたは主に逆らってきた。まして、私の死後はどんなであろうか。」

モーセが予想したとおり、イスラエルがに逆らったことは歴史が証明しています。主の前に忠実であったとはとても言えない。それでも主は見捨てなかった。いったいどういうことか。それでも主の良い約束は果たされた。それはどうしてなのか。一つの疑問です。このことはまた最後の所で触れます。

## 2) 主と心を全く一つにする

もしもソロモンの祈りが57節で終わっていたら、こんな祈り同じです。「私が悪いことをしても、罰なんか与えないで大目に見てください。それよりも神さまは、私にもっとたくさんの祝福を与えてください。」まことに虫の良い勝手な願いです。もちろんそんなはずはありません。ソロモンの祈りにはきちんと続きがあります。61節。「あなたがたは、私たちの神、主と心を全く一つにし、主のおきてに歩み、今日のように、主の命令を守らなければならない。」

主が私たちのところにいてくださるためには、当然のことですが、条件がある。主のおきてに歩

み、主の命令を守らなければならない。主のおきてとは何か。主の命令とは何か。すべて聖書に書いてあります。それを読んで守るならば、主はあなたがたを見放さず、見捨てることもない。必ず主が語ってくださった良い約束を成し遂げてくださる。言っていることは難しいことではない。非常にシンプルです。

## 3 背く者にも語り続ける

### 1) 主と心を一つにしないソロモン

しかしシンプルだから、私たちにとって簡単なことかという、これが実に難しい。私たちが悩むことは沢山ありますが、主の命令を守ることができないと感じて多くの方は悩んでいます。どうしたらよいのでしょうか。

そもそもこのように語ったソロモンはどうだったのか。人々の前で大声を出して、「あなたがたは、主の命令を守らなければならない」と叫んだのですから、自ら模範を示したはずではないのか。そう思いますが、実はそうではなかった。11章3、4節にこうあります。「彼（ソロモン）には七百人の王妃としての妻と、三百人のそばめがあった。その妻たちが彼の心を転じた。ソロモンが年をとったとき、その妻たちが彼の心をほかの神々のほうへ向けたので、彼の心は、父ダビデの心と違って、彼の神、主と全く一つにはなっていなかった。」

具体的には、外国人の妻たちが信じていた神々をソロモンも拝んでいくわけです。もちろん、これをご覧になった神は二度にわたってソロモンに警告するのですがいっこうに改めない。そのまま生涯を閉じていきます。若くして王になったとき、神からすばらしい知恵をいただき、人々の前に立って「主と心をまったく一つにして主の命令を守らなければならない」と語っていたソロモンでさえこんなありさまです。いったい誰が主と心を一つにできるのでしょうか。神は不可能な私たちに求めているのでしょうか。これは大きな疑問です。

### 2) ダビデの子孫を苦しめる

そのヒントは、11章39節にあるように思います。ソロモンの晩年に預言者アヒヤが現れ、後にソロモンに逆らっていくヤロブアムに語ったことばです。「このために、わたしはダビデの子孫を苦しめる。しかし、それを永久に続けはしない。」

「このために」とあるのは、ソロモンが主の道を歩まなかったを言っています。歴史的に見るならイスラエルはアヒヤの語ったとおりになっています。「わたしはダビデの子孫を苦しめる」という

は、イスラエルが南と北に分かれた後に、敵の軍隊に攻め滅ぼされ、人々が補囚となって外国に強制移住させられていくことを指しています。「しかし、それを永久に続けたい。」これは何度も繰り返しているのですが、ダビデの信仰に免じて「永久に続けたい」と言っています。事実そうになりました。補囚となった人たちはやがてイスラエルに戻ることができました。

さきほど、主に逆らい続けたイスラエルであったのにどうして主の約束が果たされたのか不思議だと言いました。きちんと理由がありました。

11章34節に出て来ます。「わたしが選び、わたしの命令とおきてとを守ったわたしのしもべダビデに免じて。」ダビデに免じて、罪人にも約束を果たすのです。

### 3) 逆らう民のために苦しむイエス

しかし預言者アヒヤを通して語られたみことばは、そこでとどまらない。もっと大きなことを語っているように思われます。

主は言われました。「ダビデの子孫を苦しめる。」ダビデの子孫とはいったい誰のことですか。ダビデの子としてこられたイエス・キリストを指すと考えることができます。

ちょうどいま受難週を迎えています。イスラエルがその犯した罪のゆえに確かにこの方は、十字架の上で苦しめられました。すばらしいのは、そこで終わりではなかったことです。もし主が十字架で死なれ、墓に納められて終わりであったなら、私たちには何の希望もなかったでしょう。しかし、ソロモンの時代にすでに主は語っていた。「しかし、それを永久に続けはしない。」

ソロモンは神殿を建てるという大きな事業を成し遂げはしましたが、信仰者として大きな問題を抱えた人でもありました。彼の罪はやがてイスラエルを苦しめていくことになります。しかし、イエス・キリストに免じて永久に苦しめることはしない。必ず救い出す。

このように見ていくと、預言者アヒヤの口を通して、主が三日目に死からよみがえられることを主が語っておられたことがわかります。

どんなに罪を犯し続けたとしても、なお、主は私たちをあわれんでくださって、イエス・キリストの義のゆえに、私たちを救おうとしている。その救いの恵みの豊かさをもういちど味わいたいと願います。